

葬儀並びに葬儀前後の行事について

式務部

当派における葬儀並びに葬儀前後の行事は、古来より定まっているが、近時地方の慣習などにより、種々なる形式で行なわれている現状に鑑み、真宗の教義に基き、時代の要望に応え、葬儀の姿勢を正すため、新たに二種の葬儀並びに葬儀前後の行事を決定した。

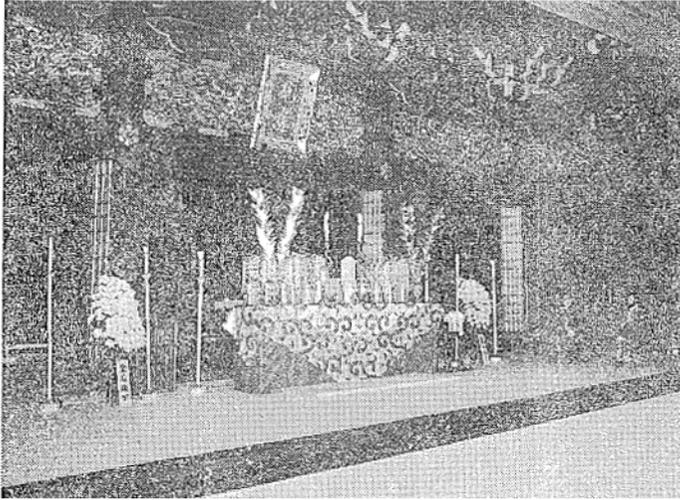
葬儀式に依用の偈文などは従来のもとは大きな変化はないが、「表白文」を加えた点などが特徴となっている。

葬儀式 第一

従来通りの棺前勤行・葬場勤行を別に行なうものである。

葬儀式 第二（告別式形式）

棺前勤行・葬場勤行を一貫して行なう、いわゆる告別式形式を示したものである。



遵徳院殿御葬儀荘厳

葬儀式第一

- 1 棺前勸行
- 2 総礼
- 3 勸衆偈
- 4 短念仏 十遍
- 5 回向 我說彼尊功德事
- 6 総礼
- 7 三匝鈴 打上 打下 打上
- 8 路念仏
- 9 葬場勸行
- 10 路念仏
- 11 三匝鈴 打下 打上
- 12 導師焼香
- 13 導師合掌の時総礼
- 14 表 白
- 15 三匝鈴 打下
- 16 (弔辞)
- 17 正信偈 中読 又は 真読
- 18 (喪主以下焼香)
- 19 短念仏
- 20 和讃
- 21 添
- 22 回向 願以此功德
- 23 総礼
- 24 (弔電披露)

葬儀式第二(告別式形式)

- 1 総礼
- 2 伽陀 先請弥陀
- 3 勸衆偈
- 4 短念仏 十遍
- 5 回向 我說彼尊功德事
- 6 総礼
- 7 三匝鈴 打上 打下 打上
- 8 路念仏
- 9 三匝鈴 打下 打上
- 10 導師焼香
- 11 導師合掌の時総礼
- 12 表 白
- 13 三匝鈴 打下
- 14 (弔辞)
- 15 正信偈 中読 又は 真読
- 16 (喪主以下焼香)
- 17 短念仏
- 18 三重念仏
- 19 和讃
- 20 添
- 21 回向 願以此功德
- 22 総礼
- 23 (弔電披露)

表 白 I

おもうに 無常の嵐は 時をえらばず 処をさだめず 老少のへだ
 てあることなし 然るに 恩愛の絆 いよいよ 断ちがたく 別離
 の情 また去りがたし
 阿彌陀如来は かかる煩惱熾盛のわれらをあわれみたまひ 超世の
 悲願を立てたもう まことにこの本願の力によらざれば いかでか
 出離生死の道あらんや
 茲に 法名 今や往生の素懷を遂げて不退の樂土に到る 本日
 葬儀に当り 香華をそなえ 仏徳を讃嘆し 生前の遺徳をしのぶ
 ただ願うらくは 遺族知友この機縁にあいて いよいよ深く真実の
 み教えを仰ぎ 撰取の光につつまれて 如来広大の恩徳を謝し奉ら
 んことを 敬つて白す

表 白 II

本日 ここに法名 の葬儀を営み 親族知友あつまりて 今生
 の別れをなす 別離の情去り難く 恩愛の絆は断ち難し されど
 我が思いすでに及ばず ただたのむべきは 彌陀の誓願なり
 阿彌陀如来は かかる我らをあわれみたまいて すでに本願の大海
 より名告りたもう まことに彌陀の本願力にあいて 空しくする
 ものなし
 ねがわくば 相会する有縁のもの 信心をひとしくして ともにそ
 の御名を称え 生死の別をこえて 永遠の命に生かしめられんこと
 を 敬つて白す

葬儀式和讃

(男)

。本願力にあひぬれば
むなしくすぐるひとぞなき
功德の宝海みち／＼て
煩惱の濁水へだてなし

ソエ正覚の

はなより化生して
衆生の願楽こと／＼く
すみやかにとく満足す

。至心信楽欲生と

十方諸有をすゝめてぞ
不思議の誓願あらはして
真実報土の因とする

ソエすなはち

定聚のかずにいる
不退のくらゐにいりぬれば
かならず滅度にいたらしむ

。十方諸有の衆生は

阿弥陀至徳の御名をき、
真実信心いたりなば
おほきに所聞を慶喜せん

ソエ信楽

まことときいたり
一念慶喜するひとは
往生かならずさだまりぬ

(女)

。真実信心うるひとは
すなはち定聚のかずにいる
不退のくらゐにいりぬれば
かならず滅度にいたらしむ

ソエ仏智の

不思議をあらはして
変成男子の願をたて
女人成仏ちかひたり

。弥陀の名願によらざれば

百千万劫すぐれども
いつゝのさはりはなれねば
女身をいかでか転すべき

ソエ正覚の

はなより化生して
衆生の願楽こと／＼く
すみやかにとく満足す

(三首引)

(一)安養浄土の莊嚴は

唯仏与仏の知見なり
究竟せること虚空にして
広大にして辺際なし

(二)本願力にあひぬれば

むなしくすぐるひとぞなき
功德の宝海みち／＼て
煩惱の濁水へだてなし

(三)如来浄華の聖衆は

正覚のはなより化生して
衆生の願楽こと／＼く
すみやかにとく満足す

(一)若不生者のちかひゆへ

信楽まことときいたり
一念慶喜するひとは
往生かならずさだまりぬ

(二)信は願より生ずれば

念仏成仏自然なり
自然はすなはち報土なり
証大涅槃うたがはず

(三)無始流転の苦をすて、

無上涅槃を期すること
如来二種の回向の
恩徳まことに謝しがたし

莊嚴

(葬儀式第一)

葬場に予め適当な位置に野卓を設け三具足を置き莊嚴する(別図参照)

打敷 白地に金又は銀摺の蓮華唐草模様

水引 萌黄地金欄又は白茶地金欄など

花 紙花(四華)と称し金銀又は白の厚紙を段切とし竹に巻いたもの

杉形華束一具(木地又は銀濃の供筒に銀の方立)

根菓餅を一对又は二対を適当に供える

金香炉に炭火用意 蠟燭は銀濃又は白を用いる

(葬儀式第二)

莊嚴は右に同じ 但し必ず御名号又は御絵像本尊を奉安する

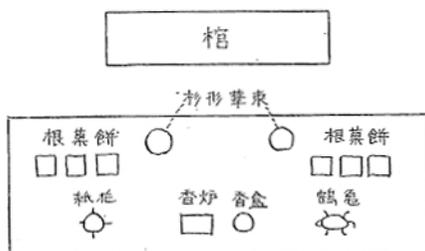
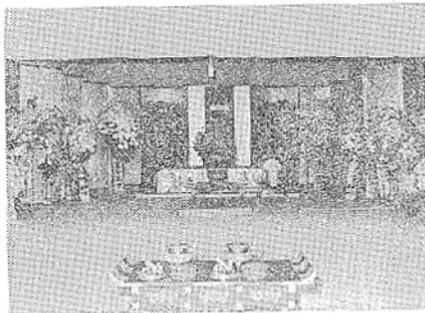
第一、第二を通じてお内仏の莊嚴は平常のままである

。装束 導師は第一種服装(白服、袍裳七条、表袴、

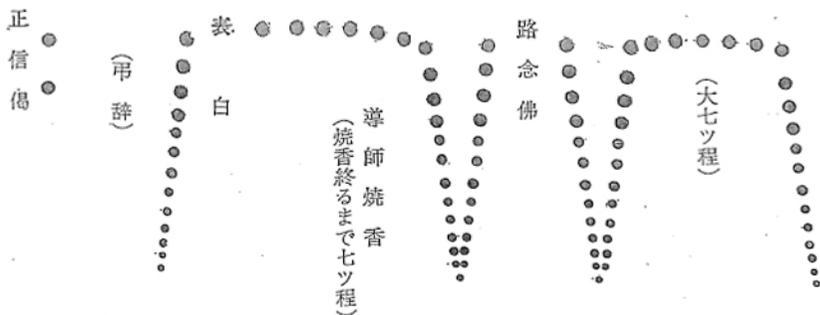
本装束念珠、袷扇) 導師以外の参勤僧侶は第二種服装

(白服、裳附五条、差貫、半装束念珠、中啓)

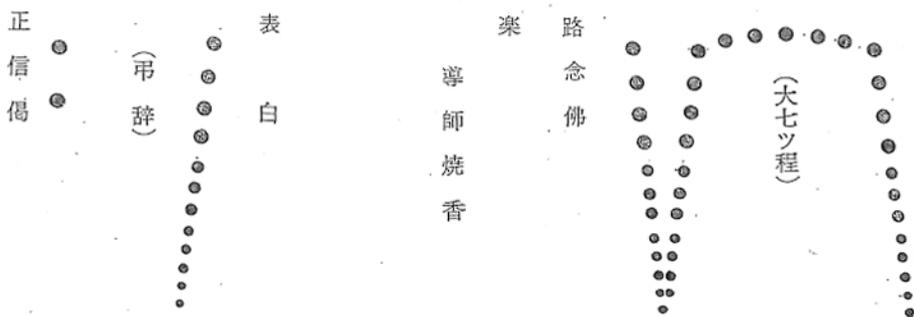
(遵徳院殿通夜莊嚴・白書院)



三匝鈴の打ち方



雅楽を依用する場合



葬儀執行についての注意事項

- 1 伽陀
葬儀式第二に於て、儀式を一層莊嚴ならしむるため、総礼(1)の次に伽陀(先請弥陀)を加える。
- 2 短念仏の勤め方
勸衆偈の短念仏(第一…3 第二…4)は、十遍(調声、助音二遍、調声、助音六遍)とし、正信偈後の短念仏(第一…14、第二…14)は、遍数の定めはない。
- 3 回向の勤め方
回向(第一…4、第二…5)は、「我說彼尊功德事」の七字を調声とする。
- 4 三匝鈴の打ち方
三匝鈴の打ち方は、別図に示す通りとする。
- 5 表白について
導師は表白(二文のうちいずれを用いてもよい)をあらかじめ用意し、焼香終つてその位置で読む。三匝鈴打下げ(第一…12、第二…12)のうちに復座する。
- 6 正信偈後の念仏和讃について
短念仏(第一…14)後、三重念仏を加えてもよい、又は短念仏(第一…14 第二…14)を廃して、三首引としてもよい。
念仏、和讃、回向の洵は、洵三又は洵五三とする。
和讃(第一…15、第二…16)は、別表のうちから選択する。
- 7 喪主以下の焼香について
正信偈「五劫思惟」の調声終つて、喪主以下近親者焼香のこと。
- 8 弔辞・弔電披露のある場合
弔辞は、表白後、導師が復座してから行ない、弔電披露ある時は総礼終つて行なう。
- 9 雅楽を依用する場合
入場 退場及び導師焼香(第一…10、第二…10)の際 奏楽する。
導師焼香の際の楽は、路念仏(第一…8 第二…8)終つて発楽、別図に示す通り、導師焼香終るまでの三匝鈴に代えて奏楽をし、導師焼香終つて楽止。次に表白(第一…11 第二…11)となる。表白後三匝鈴の打下げのみを行なう。